様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月１３日現在

機関番号：２３９０３
研究種目：基盤研究（C）2010～2012
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５９０６４４
研究課題名（和文）　古代日本の宮殿の建築的特質と歴史的意義に関する研究

研究課題名（英文）　STUDY ON THE ARCHITECTURAL CHARACTERISTICS AND THE HISTORICAL SIGNIFICANCE OF IMPERIAL PALACE IN THE ANCIENT JAPAN

研究代表者
溝口　正人（MIZOGUCHI MASATO）
名古屋市立大学・大学院芸術工学研究科・教授
研究者番号：20262876

研究成果の概要（和文）：古代宮都の完結となった平安宮を主たる対象として、採用された建築形式について分析し、日本の宮殿の社会的性格と、結果として採用された建築形式、そして中国を中心とした東アジア文化圏における位置づけを考察した。採用された建築形式の分析により、日本の宮殿建築は歴史を踏まえつつ、一方では時代的な特徴をあらわす象徴的な建築であること、時代的な変化が重層的に採り入れられることを指摘した。

研究成果の概要（英文）：THIS RESEARCH AIMS TO CLARIFY THE ARCHITECTURAL CHARACTARISTICS OF IMPERIAL PALACE IN THE ANCIENT JAPAN,MAINLY ON HEIANKYU. AND THROUGH COMPARATIVE STUDIES ON THE MAIN BUILDING OF JAPANESE IMPERIAL PALACES IN THE ANCIENT WITH THE MODERN AGE AND WITH THOSE OF ANCIENT EAST ASIA, IT IS POINTED OUT THAT THE ARCHITECTURAL STYLE OF THE PALACE BUILDING WAS DECIDED ECLECTIC WAY, AND THE RENEWAL OF THE STYLE WAS CAUSED BY CHANGE OF THE AFFAIRS OF THE NATIONAL CEREMONIES

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	700,000	210,000	910,000
総　計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：工学
科研費の分科・細目：建築学　・　建築史・意匠
キーワード：宮殿建築・平安京・宮殿・東アジア・宮都・大極殿・寝殿造

１．研究開始当初の背景

宮殿は、政治的な存在として様々な活動が位置づけられる王の居所であるから、王権に付随する様々な行為が展開する空間的な機能を有しているとともに、存在そのものが社会的意味を持っていると考えられる。

特に平安宮は、平面のみならず絵巻物などによって外観も確認できる古代宮殿の事例であり、また立体的な情報が考古学的な遺構解釈によるしかない平安宮以前の宮殿建築を遡及的に理解する基点となっているとともに、安貞元年（1227）の焼失後も宮殿建築の古典として認識されて、建築の読み替えによる変容を遂げながらも中世以後に継承される。復古様式を採用した近世内裏（御所）では平安宮が設計段階での目標となり、江戸城西ノ丸に新たに建設された明治宮殿は、この近世内裏が参照されるべき存在となった。つまり通史的にみた日本の宮殿建築の動向は、平安宮前後で関連づけて考察すべき対象ということになる。平安宮を基点とした国家の象徴ともいうべき宮殿建築の実態把握は、古代宮都の変遷と画期を把握する上での不可欠な基礎的事項であるとともに、日本における建築の志向性を知る上で重要な作業といえるのである。

従来の建築史においては、社寺・住宅といった様式史的な区分での考察が主流となってきており、宮殿という建築種について包括的に比較考察されてきたとは言い難かった。近年、川本重雄は、日本の住宅の空間を理解する重要な切り口として儀式を取り上げ、儀式空間に古代の貴族は住んだのだと論じ、その見方を宮殿建築にまで敷衍する斬新な見解を示した（川本重雄『寝殿造の空間と儀式』2005）。しかしながら物質文化としての建築の特質が、儀式でのみ理解可能というわけでもない。やはり宮殿のような王権に付随する建築には、固有の象徴性や社会的な存在意義があり、その反映としての建築形式が選択されたと考えるべきと考えられる。

このような問題点に関して、申請者は「東アジアにおける日本の宮殿建築」（日中比較建築文化史の構築、2008、国立歴史民俗博物館）において概観したが、文献史料や考古学資料を合わせた古代宮殿建築の検討に関しては決して十分なものとはなっていない。そこで、古代日本における宮殿に採用された建築形式についての分析をもとに、宮殿とはどのような社会的性格を持ち、結果として採用された建築形式はどのようなものであったか、そしてそれはどのように意義づけられるものであるかという本研究の必要性があると考えた。

２．研究の目的

古代から近代までの全ての宮殿建築の事例を詳細に比較検討し、さらに中国や朝鮮半島にまで考察の対象を広げることは、研究期間内では妥当ではない。本研究は、平安京の宮殿建築を主たる分析対象として、宮殿に採用された建築形式について、文献史料、絵画資料を再度詳細に分析し、合わせて考古資料と付き合わせながら、規模的な実態、建築的な特徴について整理する。そして果たして平安宮以前の宮殿建築に、それら規模的な実態と建築的な特徴がどこまで遡及しうるのか、遺構など考古資料と付き合わせながら再検討する。さらに近年、情報が明らかになりつつある中国や渤海、朝鮮半島の宮殿建築の遺構と比較対照することで、東アジア文化圏においてどのように位置づけられるものであるかを考察する。また、再び宮殿建築が国家的な意味を持つに至った明治宮殿とも比較しながら、古代における宮殿建築の形式が持つ意味について考察する。

申請者は、平安・鎌倉時代貴族住宅の空間構造についての研究を続けてきた過程で、平安時代後期において、住宅建築と人々の空間に対するスケール観に宮殿建築が影響を与えていることを確認してきた。そのため宮殿の存在がもっとも象徴的な形で儀式に反映される天皇の即位式に焦点を絞り、「中世即位式の空間構造」（『建築史の想像力』所収、1996）を発表した。この論文では、平安時代後期と鎌倉時代以降を比較しながら天皇即位儀式の場となった建築と儀式との相関を分析し、古代に培われたスケール観の変容過程を論じた。ただし平安宮およびそれ以前の宮殿の実態については、検討を加えることなく既往の研究によったものであった点では、問題を残していた。そこで本研究では、このような問題意識の基づき、平安宮を主たる分析対象に位置づけ、その結果を受けて遡及的に宮殿建築の実態を解明することを第一の目的とした。

３．研究の方法

本研究は、第一に、日本においては、平安宮を中心に、それ以前の歴代宮都における宮殿中核殿舎との建築規模・形式の変遷の再検討、第二に同時代の中国を頂点とする東アジア地域の宮都の中核殿舎の実態把握と再検討、この二点を基礎データとなる考古資料と文献史料の整理・再検討によって行った。

そして第三として、以上の検討をもとに、日本、中国、渤海や高句麗など東アジア諸国の宮都中核殿舎との比較検討を進め、古代東アジア地域の社会情勢との相関の分析を合わせて、古代日本の宮殿建築の建築的な特質とその歴史的な意義を考察するという３段階からなり、それぞれの段階を当該年度の研究テーマとした。

まず、可能な限りの悉皆的な文献の調査を行い、平安宮を中心とした宮殿に関する記述を網羅的に収集し整理する。続いて近年データが蓄積されつつある考古資料との比較検討を行い、建築との相関に着目しながら整理を行った。

考古資料と文献史料の整理・検討によって、同時代の中国を頂点とする東アジア地域の宮都の中核殿舎の実態把握・整理を行う。前年度に把握された日本の大極殿の変遷と合わせて多角的に分析・検討した。

以上の分析と考察により得られた建築規模・建築形式に関する知見をもとに、日本、中国、渤海や高句麗など東アジア諸国の宮都中核殿舎との比較検討を進め、古代東アジア地域の社会情勢との相関の分析を合わせて、宮殿建築の建築的な実態と歴史的な意義について考察し、研究の総括を行った。

４．研究成果

平成 22 年度では、文献調査を行い、平安時代における平安宮を中心とした宮殿に関する記述を網羅的に収集し整理した。特に同時代的な視点から、古代日本の人々の建築形態の把握の実態について資料の再整理を行い、宮殿建築の中枢を占める大極殿と寺院建築との形態的な類似性が、当時の認識にも表

れていることを文献的に実証した。さらにその他の貴族住宅や寺院として施入された事例について建築形式の整理を行い比較検討した。成果は論文「平安時代の建築観と建築的実態ー『左経記』長元元年７月 19 日条の記述を手がかりとしてー」にまとめた。『左経記』に記される「案大極殿體非寝非堂、所謂廟作也（諸寺金堂皆廟作也、所謂入於塔廟云々、或書云、廟元言誤也云々）、」といった暦道、陰陽道の意見は、宮殿建築のうちの大極殿や朝堂院の建築群が、当時の認識で、寺院建築と同様な建築種として捉えられていることを示していると指摘し、古代においては、住宅と寺院といった用途種別というよりは、形態や形式から導かれる建築観の存在が指摘できることを明らかにした。

続いて近年データが蓄積されつつある考古資料との比較検討を行い、建築との相関に着目しながら整理を行った。特に平安時代の宮殿や貴族住宅の建築について、遺構から規模や配置が推定される事例について配置と敷地利用の観点から前面のオープンスペースとの関係について整理した。この点では近年の発掘調査の進展から考察が可能になった里内裏の事例を例示して歴史的な背景を踏まえた考察を行い、建築の配置が宮殿建築にみられるような左右対称性のみでは決定されていないことを指摘した。また住宅建築に接近する寺院建築の形態的な実態を整理し、京内と京外との空間的な相違が建物の配置や選択される建築形式にも関連があることを、庭園との関係から読み解いた。

平成 23 年度では、平安宮大極殿の整理分析を行った前年度を承けて、東アジア諸国の宮都における中核殿舎の建築的な実態検討を、主に文献による考古学的な情報をもとに行った。東アジア地域の古代宮殿建築では、平壌東郊の安鶴宮のように建造年代に関する考古学的な見解が分かれている遺構がある。考古資料と文献史料の整理・検討によって、同時代の中国を頂点とする東アジア地域の宮都の中核殿舎の実態把握・整理を行った。特に渤海上京龍泉府の遺構の再検討を行い、従来の遺構解釈とは異なる可能性を見いだした。この成果を踏まえて改めて安鶴宮との比較を行い、安鶴宮の遺構の再検討を行った。あわせて日本における宮殿建築の空間的な特殊性を確認するために平安時代における宮殿と貴族住宅の比較、さらには寺院建築との比較を行った。後半の分析に関しては、その成果として「寝殿造の空間と庭園ー平安時代の庭園と建築の関係に関する基礎的考察ー」を発表した。この論考では、平安時代の貴族住宅として想定されている寝殿造の事例と平安宮内裏、また平安時代に頻出する浄土系庭園を伴う阿弥陀堂系の仏堂の事例について、空間的なスケールの差異を指摘した

図１　同一縮尺で比較した建築・南庭・園池

が、その結果として、改めて宮殿建築の規模的、空間的な実態が一般貴族住宅とは同列に比較できない特殊な存在であることが明らかになった（図１）。

平成 24 年度では、東アジア諸国の宮都における中核殿舎の建築的な実態把握を、考古資料と文献史料の整理・検討によって行った前年度の成果を踏まえ、今年度前半では、平安宮大極殿の建築的な実態の整理を再度行うことが年度前半の分析作業である。特に、奈良時代後期から平安時代初めまでの遷都に伴い大極殿がどのように変化したか、また平安時代において焼亡の後に再建された大極殿が、どのように変化したかに着目して建築的な指向性を考察した。

年度後半では、日本、中国、渤海や高句麗など東アジア諸国の宮都中核殿舎との比較検討を進め、古代東アジア地域の社会情勢との相関の分析を合わせて、宮殿建築の建築的な実態と歴史的な意義について考察し、研究の総括を行い、論文「日本の宮殿建築における建築と空間の志向に関する素描」としてまとめた。8 世紀における東アジアの宮殿建築の雛形としての長安城大明宮の存在について、文献史料と以降の比較から確認し（図２）、さらには近代の明治宮殿の成立にも指摘できる宮殿建築における賓礼の重要性を確認し、国家儀礼としての賓礼の消長から宮殿建築の変遷が読み解けることを指摘した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

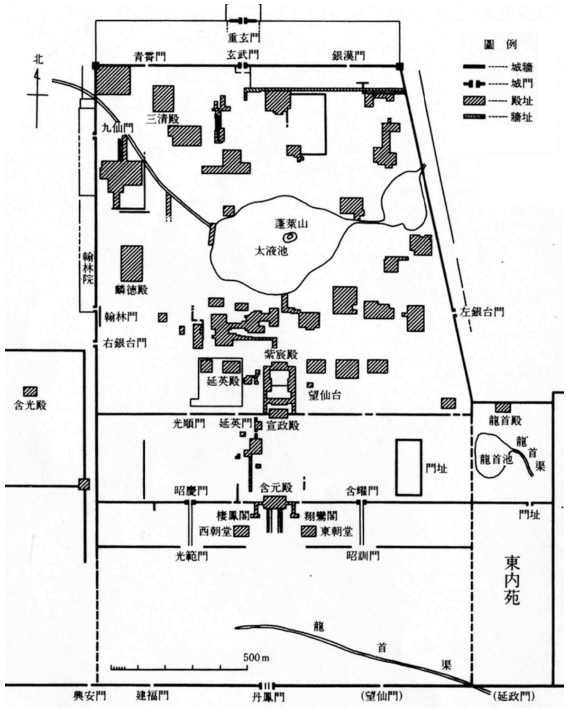
①<u>溝口正人</u>「平安時代の建築観と建築的実態ー『左経記』長元元年７月 19 日条の記述を手がかりとしてー」名古屋市立大学大学院芸術工学研究科紀要『芸術工学への誘い』ＸＶ、2011、129-135、査読なし

②<u>溝口正人</u>「平安時代の建築と庭園」奈良文化財研究所学報『研究論集 17　平安時代庭園の研究ー古代庭園の研究Ⅱー』、2011、103-119、査読なし

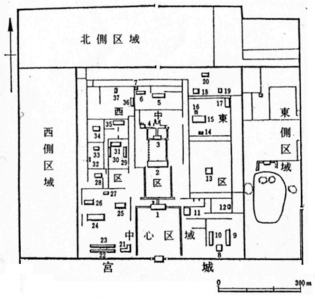
③<u>溝口正人</u>「寝殿造の空間と庭園ー平安時代の庭園と建築の関係に関する基礎的考察ー」芸術工学への誘いＸⅥ、2012、135-142、査読なし

④<u>溝口正人</u>「日本の宮殿建築における建築と空間の志向に関する素描」芸術工学への誘いＸⅦ、2013、41-51、査読なし

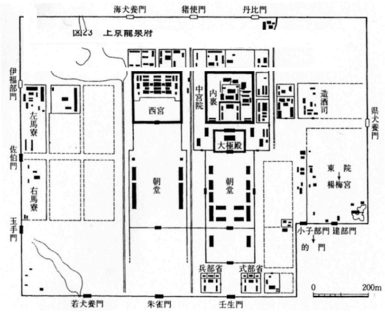
〔学会発表〕（計２件）



長安城大明宮（馬得志「唐代長安与洛陽」〔『考古』1982-6〕より転載）



渤海上京龍泉府 755-784, 794-926



平城宮（奈良時代後半, 750以降）

図２　８世紀半ばにおける東アジアの宮城（同一縮尺での比較）

①<u>溝口正人</u>、平安時代の建築と庭園ー貴族邸宅と庭園ー、「古代庭園研究Ⅱ」検討会、2010. 9. 18、奈良文化財研究所 小講堂

②<u>溝口正人</u>、コメント「住宅史の立場から」、シンポジウム「中世建築における様式研究の再考」、2011. 12. 10、京藝術大学美術学部 中央棟 第１講義室

〔図書〕（計１件）
①ダン・クリュックシャンク編。飯田喜四郎・片木篤・河辺泰宏・佐藤達生・辻本敬子・丹羽和彦・野々垣篤・堀田典裕・溝口正人　訳、西村書店、『フレッチャー　図説　世界建築の歴史大事典ー建築・美術・デザインの変遷ー』、2012、1898

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

〔その他〕
ホームページ等
該当なし

６．研究組織
(1)研究代表者
溝口　正人（MIZOGUCHI MASATO）
名古屋市立大学・大学院芸術工学研究科・教授
研究者番号：20262876

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし